

民族宗教とアイデンティティ——北米・ハワイからみる神道

岡本雅享

1. 神道——日本人の民族宗教

ひろちさや『仏教と神道』（新潮選書、1987年）は、2004年現在37刷というロングセラーだが、その第I部「民族宗教と世界宗教」で、世界宗教である仏教に対し、神道は日本人の民族宗教であるとし、次のように記している。

「神道は日本人の宗教—日本民族の宗教—ですから、日本人以外は信者になれないのです。私たちは、中国人や韓国人を日本人として受け入れようとしません。……日本人という『血』にこだわっています。日本国籍をもった欧米人も、いつまでも『ガイジンさん』です。そのような意味で、日本人は異人種に対して排他的です。そのような日本人の排他的な感情にもとづいて神道があるので、日本人以外の人は信者になれないのです。神道の信者は、純粹の日本人でなければならないと思われています。……逆に、日本人であれば、それだけで神道の信者にされてしまいます」（13,21頁）。

この論理に従えば、神道の信者か否かが、「純粹の日本人」の枠と一致することになる。同書は1985年末時点で、各都道府県知事に届出のあった宗教法人の信者数を一覧表にしているが、神道系は全国で信者総数1億1560万人、対住民人口比にして96%。しかし各都道府県別にみると、沖縄県のみが19%という低さになっており、全国平均値を下げている（41～43頁）。ひろ氏の説によれば、沖縄県人の大部分は日本人ではないことになる。これが契機となって、筆者は沖縄・宮古・八重山諸島をめぐる神社・御嶽調査を始めることになるのだが、その成果は別の機会に述べよう。

この統計からは、もう一つ検討すべき問題が浮かぶ。ひろ氏によれば、その%は「住民人口

の何%が信者となっているか（信者として届け出られているか）を示しているというが、同じ1980年代半ばの「日本人の国民性」調査（統計数理研究所国民性調査委員会）では、回答者の7割が「宗教を信じていない」とし、「信じている」人は3割となっている（林知己夫『日本人の国民性研究』南窓社、60頁）。この3割の中には、神道だけではなく、仏教、キリスト教その他諸宗教が入っているのだから、「神道の信者か」と問われて「はい」と答える人は、もっと少ないだろう。ということは、日本人の多くは、自分は神道の信者だと思っていないが、神道の信者として届け出られ、行政の公的な統計上、神道の信者となっているということになる。この点、ひろ氏は前掲書で次のように述べる。

「たいていの神社はその土地の住人を『氏子』、すなわち神道の信者とみなしています。……日本人であれば、信仰表明をしなくても信者とされるのに、外国人がいくら信仰表明をしても、『氏子』とは認めてもらえない。いや、日本人の場合は、神道の信者にならないと明白に信仰を拒否しても、信者にされてしまいます」（21～22頁）。はたしてこれが神道本来の宗教的性格であり、それを日本人の多くが納得して受け入れているのだろうか。

以前、小泉首相の靖国神社参拝問題について、国外のメディアがどう報道しているかを調べようとし、BBC World Newsのウェブサイトを開いた時、そこにある日本の「Country profile」を開けると、「人口」「首都」「主要言語」の次に「主要宗教 (Major religions)」という項目があり、Shintoism, Buddhismと記してあった。日本の主要宗教は、第一に神道、第二に仏教ということである。文化庁『宗教年鑑』（宗教統計調査）が記載する、2005年12月末現在の日本国内における神道系信者数は1億724万7522人

で、仏教系信者数は9126万273人。行政府の公的統計で、神道系信者数が仏教系信者数を上回り首位になっているのだから無理はないが、その前提で靖国神社問題を語る時、国内外で、映り方が大きく違って来る。

国外からみれば、大多数の国民が神道の信者である国において、首相が246万余の戦没者らにそれぞれ「……ノ命」という神号を与え、それを祭神として崇拝・信仰する神社に参拝する—それを多数の日本人が支持している、ということになる。

いっぽう、日本国内では多くの人々が（自分が神道信者とされていることを知らず）「神社に参って何が悪い」と、外国からの批判に不快感を持っているように思われる。初詣や七五三で神社を参拝し、神を拝みながら、それを宗教活動だと思っていない人が多い。あえていうなら、それは日本の文化・慣習だと。だから、首相が参拝するのも、別にいいのではないかと。日本国憲法が厳格な政教分離を規定するに至った背景（国家神道令など）に基づけば、靖国神社と同様、伊勢神宮参拝も問題になるはずだが、首相が毎年正月、伊勢神宮を参拝してもほとんど問題にされず、政権交代を目指す民主党の代表（国会議員）も（2003年から）伊勢神宮参拝を始めるところに、「日本人」とくられる人々の自己認識が投影されている。

初詣や七五三は国外から見れば宗教活動そのものであるし、靖国神社に行けば、家内安全、合格・学業、安産、交通安全、病気平癒、縁結び、厄除、開運など多種多様な御札・御守が売られており、人々がそれを買って持っている。筆者は2006年2月、靖国神社で数多の「願事成就」の絵馬を見たが、そこには合格祈願や就職、恋愛成就、商売繁盛など、様々な祈願が書かれていた。多くの人々が靖国神社の神—立山英夫命他246万6531神（2006年現在）—にそうした御加護があると認めているのだから、自分は神道の信者ではないと言っても、客観的には通用しない。

これまで靖国神社については、中国や韓国或いはアメリカ合州国等との外交問題として議論されることが多かったが、そうした受動的な対応は、中国や韓国への反発を生み、感情的な水掛け論に陥ってしまった感もある。だが靖国神社の問題は、第一義的には、日本人が、日本の民族宗教とされる神道を、どんな宗教としてとらえるのか、

日本人の宗教観・宗教性に関わる問題として、議論すべき問題だと思う。天皇に忠誠を尽くした戦没者を祀る靖国神社は、神社の歴史的類型からみても、産土型（古代～）や勧請型、御霊型（平安～）など近世までのいかなるタイプにも当てはまらない新種の神社である。伊勢神宮は古いが、中世から幕末まで民間信仰「お伊勢さん」で親しまれた外宮（豊受大神）主体の伊勢神道と、それを潰し、全神社の本宗（総本山）として改造した明治以降の内宮（天照大神）主体の伊勢は、同名異体の存在ともいえる。その国家神道を作りあげの中で、政府がごとごとく民間信仰体系を破壊・解体し、「神殺し」を行ってきたことが、現代日本人の宗教に対する無頓着さ、靖国問題に対する視点のズレをもたらしめているようにみうけられる。

日本では、藺田稔『神道—日本の民族宗教』（弘文堂、1988年）をはじめ、神道が日本人（或いは日本民族）の民族宗教であるという言説は少なくない。そして神道は「日本民族の伝統的信念および生活信条として発展」した「日本民族固有の信仰・思想」である（阿部正路『神道がよくわかる本』PHP研究所、2004年）などと言うように、その多くが、単一民族論と同根の、民族的特質に由来する固有性や閉鎖性などを説いているように思われる。しかし一歩日本の外へ出ると、そんなことは思い込みに過ぎないという現実を、目の当たりにすることになる。現在身をおく北米西海岸から見える情景を述べてみよう。

2. 世界の中の神道

民族宗教は、宗教民族学から発生したEthnic Religionの訳語である。創始者を持ち、その教説に拠るが故に、人種、言語、国家を超えて伝播する創唱宗教・世界宗教（キリスト教、イスラーム教、仏教等）に対し、民族宗教は、創始者を持たず、血縁、地縁、文化的伝統、習俗等の一定の枠組みの中でしか行われぬ宗教とされる。その代表としてユダヤ教、ヒンズー教、道教と神道がよく挙げられる（村上、2～3頁）。

ひろ氏は近著『やまと教—日本人の民族宗教』（新潮選書、2008年）で、神道を「やまと教」と改称するよう提案するとともに、それは「外国人が信者になれない民族宗教」との視点を再度提示しているが、民族宗教そのものが異民族

に対する排他的な性質を具有しているわけではない。それどころか、創唱宗教はすべて民族宗教を母胎として成立し、発展した民族宗教は教団を形成し、民族集団の外へ進出し布教するなど、創唱宗教と類似・競合する傾向が強いとされる（村上、3,9頁）。神道と同じく民族宗教とされるヒンズー、ユダヤ、道教の現状をみれば、それは明白だろう。それを踏まえた上で、村上重良氏は「神社神道は、発展した民族宗教としては他に類例をみない、日本社会の外に伝播する条件を完全に欠いた宗教であり、人種、言語が単一で、地理的に孤立した国土をもつ日本民族にしか通用しない宗教である」と述べている（村上、10頁）。

こうした見解は、筆者がこの1年滞在中のアメリカにおける状況を見ただけでも、妥当とは言えない。例えば、現在シアトル近郊にあるアメリカ椿大神社（Tsubaki Grand Shrine of America）は、アメリカ人のバリッシュ現宮司が1992年に建立したものである。また、前田孝和『ハワイの神社史』（大明堂、1999年）によれば、ハワイのマウイ島にあるマラエア恵比須金比羅神社は、日本人漁業関係者の守り神として1914年に鎮座した神社だが、現在はマラエアで漁業に携わる多くの人々（日系人以外の関係者）の信仰の対象となっており、理事長も日系人ではない（viii頁）。航海の安全を祈る海神信仰が、日本（系）人の枠を超えて伝播しても、奇異なことではなかろう。また、神道思想に関する本も多数出ており、Amazon.comのレビュー等見ると、その思想に関心を示している人は、英語圏だけでも少なくないことが分かる。

また、歴史を遡ってみれば、「神道」という用語は、中国において古くは『易』の観卦の象伝に見受けられ、漢の武帝の頃（紀元前）から宗教的な意味での用例があり、また「神社」という文字は紀元前の『墨子』の中に、神宮は2世紀半ばの『詩経』の鄭玄注の中に出てくる。いっぽう日本では『古事記』（712年）に出てくる石上神宮が文献上最も古い神宮の用例で、後に神宮の代表となる伊勢の場合、『日本書紀』（720年）で伊勢大神の祠、五十鈴の宮などと書かれている（司馬遼太郎・上田正昭・金達寿『朝鮮と古代日本文化』中央公論社、1978年、12、41頁）。先日、米国仏教大学院のグランバック助教

授が、ベトナム版ヒモロギの写真を見せて下さったが、神籬^{ヒモロギ}さえも日本の神道固有のものではない。海流で繋がる海の道を通じて、現在の国境とは無縁な人々の往来による相互交流の中で培われたのが、多様なルーツをもつ日本の文化であり、神道である。

村上氏は、民族宗教は、機能と構造面では「儀礼が中心で、共同体の生活と生産の維持を主目的として、集団の全成員によって担われる」特徴をもち、神社神道では、イネづくりを主体とする農耕社会における、イネの豊饒を求める農耕儀礼が主要な内容を形成していると述べる（5,7頁）。神道の一部を全部に置き換えているようなひろ氏の論に比べると、神道の中の神社神道に限定した村上氏の議論は慎重であるが、これは網野善彦氏が言うところの、日本は「孤立した島国」「稲作中心の社会」という「根拠のない虚像」「国家に引きずられた架空の議論」（網野善彦『「日本」とは何か』講談社、2000年）に影響された観念ではないか。出雲の竜蛇信仰を提示しただけでも、その論拠は崩れる。

今の日本の中に身を置いていると、いくつもの神道、海の道で（現日本国外と）つながる神道の共通・類似性や普遍性が、見えにくくなるのだろう。同じく創唱宗教とされるヒンズー、ユダヤ、道教が国境を超えて伝播しているのに、神道だけがそうならないというのは、思い込みでしかないように思われる。何が日本人固有の伝統・信仰・思想か—そのことについては、日本以外の国でマイノリティとして暮らす日系人の方が、在日日本人より往々にして敏感である。しかし、神道を日本人の民族宗教として議論する場合、はじめから日本の国内に視野を限定し、日系人の存在など眼中にない人が多い。ところが実際は、様々な宗教が競合し、（もちろん氏子地区などなく）日系人だけを対象にしては成り立たなくなるハワイや北米の神社（関係者）の方が、国内婚姻総数の7%が国際結婚となった今でも、「外国人は神道の信者になれない」という説が罷り通る（それでは、人心は神道からますます離れていくだろう）日本にいる人々よりも、神道とは何かをより真剣に考えざるを得ない状況に置かれているのである。

3. 日系人と神道

井上順孝氏は、ある民族が集団で外国に移住した時、民族的アイデンティティ保持に宗教が大きな役割を果たすのであり、日系人にとっては日系宗教が、自らの民族的ルーツを確認する際のシンボリックの意味を担ってきたという。渡米して、法律、経済、教育面でもアメリカの制度・慣習の中に組み込まれる中で、日系人である証を確かめようとすれば、自ずとそれは現実的な制約の少ない文化的側面に集中し、中でも民族文化の様々な要素が凝縮され、かつ家族や同県出身者といった特定の集団単位で共有しやすい文化である宗教が最も重宝となる、と(井上、212～213頁)。

今筆者の手元には『北米毎日新聞』2009年元日号があるが、そこに掲載された賀正新聞広告欄(全部で128)を見ると、トップから3頁目までが、浄土真宗(東・西)本願寺ほか仏教教団や金光教、天理教など40を数える日系宗教団体でほぼ占められている(3分の1)。今の日本国内の新聞では、見られない光景だ。日系宗教団体が米国日系人社会でいかに重要な地位を占めているかが、よく分かる。

それならば、日本人の民族宗教とされる神道が、日系アメリカ人等の間で、民族的アイデンティティの重要な拠り所として機能しているかということ、そうではない。1979年、①初詣やお盆などの宗教儀礼への参加の度合い等を調べる目的で、ハワイの日系人大学生・高校生を対象に行われた調査では、ハワイの神社はその存在さえほとんど知られておらず、時々にも初詣に行くという者は2割にも満たないという結果が出ただけでなく、調査票を配った際、学生達が次々に「ハツモウデとは何のことか」「シントウシュラインとはどういう意味か」といった「思いがけない」質問をして、調査者を慌てさせたという(井上、77～78頁)。前述したように、非日系人の間に神道が伝播する現象が見られる一方で、日系人の間では三世、四世へと世代が進むにつれ、神道の観念・知識が希薄化していることだ。

日本の神道が今の北米でほとんど見られない理由として、日米戦争の後遺症があることは無

視できない。北米では、日系移民の流入に伴って、戦前、北米大神宮本院、出雲大社北米教会、稲荷神社など数社が創建されていたが、太平洋戦争で神社は軍国主義を支える精神的支柱とみなされ、神社がなくなった。現在シアトル近郊に移転したアメリカ椿神社が、戦後はじめての神社として、カリフォルニア州内で建立されたのは1987年である。

しかし、それだけではないと思う。井上氏は、北米で、日系仏教教会がかなり存在する理由として、「仏教教団は、祖先祭祀に関与している。祖先とのつながりを大事にするという感覚は、アメリカで生活を営むようになっても、そう簡単に消滅あるいは希薄化しないようである。祖先崇拝の原理自体が、根底からつき崩されつつあるという印象はない」と記している。いっぽう神道は、地縁的な関係に依存した習俗に基づいて信仰されており、アメリカで生まれ育った二世や三世は鎮守の森とか、小高い山の上にある社といった景観に馴染みがなく、町や村のどこかに神社＝神域があるのを当然と考える感覚を喪失しているという(井上、83～84頁)。

日本では神道は祖霊信仰だという人もいれば、自然信仰だという人もいる。しかし北米の状況を見る限り、神道は祖先祭祀の受け皿となり得ていない。そして、風土の上に成り立つ人々のつながりや神の領域を感じさせる自然環境がないため、広まらないでいる、と見受けられる。いっぽうハワイでは、戦前の59社からみれば激減しているものの、戦後間もなく再建されたりして、7社(ハワイ大神宮、ハワイ出雲大社、ハワイ石鎚神社、ハワイ金比羅神社、ヒロ大神宮、マウイ神社、マラエア恵比須金比羅神社)が現存している。日系人が人口の4分の1を占める点は、もちろん主要な要因だろうが、ハワイという土地(柄)にも意味があると思う。ハワイでは、建物の地鎮祭やお祓いがよく行われるという。お祓いがハワイで盛んなのは、ハワイという土地がそもそも、タブーという概念が重要な役割を果たすポリネシアに属し、呪術的な風習が多くあった所だからだと、ハワイ出雲大社の宮王(前)宮司は語っている(井上、92頁)。ハワイでは、地藏信仰が英語を日常語とする人々にも多く受け入れられているという(中牧、John Clark, *Guardian of the*

sea: Jizo in Hawaii, University of Hawaii Press, 2007)。戦後も、病気直しや憑きもの落としなどを行う日系霊能者が活躍しているのも、米国「本土」とは違う（中牧）。これらの点については、ハワイに実際行って、確かめたいと思う。

4. 神々の抹殺

筆者は沖縄・宮古諸島の御嶽・拝所を巡り歩き、さらに出雲の古社を巡る中で、神社自体は場所の目印にすぎず、大事なのは神社がある場所、或いはそこから見えるものなのだと思うようになった。出雲でも、出雲大社、美保神社、日御碕神社などは、いずれも舟が外海から入ってくる玄関口にある。また出雲郷の式内社を巡ってみると、いずれも神名火山がよく見える位置に建っていた。

また多良間島で御嶽や拝所をまわった時などは、まるで葬地を巡っているように感じた。伊良部島のあるカンカカリヤ（霊能者）から、御嶽には霊が集まっているから、むやみに立ち入ってはならないのだと聞いたこともある。谷川健一氏によれば、祭場は葬地と関連している所が多い。モリ（神降臨の依代である木が数本生えている所が多い）と呼ばれる聖地＝神祭りの場所は、もともと葬地であったり、また葬地に近かったりする例が多いという（谷川、11頁）。

実はこのモリが神社の起源である。「万葉集」には神社をモリと訓ませている例がいくつかあるが、鳥居も拝殿も本殿もなく、神の目印となる特定の木さえあればモリと呼ばれていたというのだ。もともとヒモロギは、神が降臨する場所を常緑樹で囲うだけで、祭りが終るとすぐ壊していたが、後に祭場に仮小屋を建てるようになった。それが「祭りの時に仮小屋を建てるための土地」を意味するヤシロ（社）の原型であり、いつしか神社を表す語となったとされる（谷川、16頁）。

つまり神社本来の姿からいえば、社殿は重要ではない。そしてモリの多くは、もともと、それがあつた場所の意味があつたはずである。そのモリや、土着の神々を、明治以降の政府は消し去っていった。

安丸良夫は、明治政府の神道国教化政策は、頂点に記紀が記す神々と皇霊を戴き、次に諸国

の有名神社と国家の功臣を配し、底辺に村毎の氏神と祖霊への崇拜をおく神々の体系を樹立し、それ以外の宗教的なものを祀りや邪教として斥け、人心を支配秩序の内へ取り込もうとするものだったとする。こうして新たに樹立された神々の体系は、明治以前から列島に住んでいた人々にとっては、思いもよらない性格のものだった。伊勢信仰でさえ、江戸時代のそれは農業神としての外宮に重点があり、天照大神信仰も、民衆信仰の次元では、皇祖神崇拝ではなかった（安丸、7、120頁）。

伊勢神宮は、在来の土地神である豊受大神を祭る外宮と、天照大神を祭る内宮からなるが、中世以降明治に至るまで、膨大な数の御師の活動によって、幅広い階層の伊勢参宮の需要を満たし、経済的にも信仰的にも大きな力を持っていたのは外宮の方であり、伊勢神道の教説（神系譜の上から豊受大神が天照大神に先行する神だとし、外宮の優位を説く）も、外宮の神職の間から生まれたものである（菅野覚明『神道の逆襲』講談社、2001年、50頁）。その伊勢神宮を、政府は明治4年から5年にかけて、世襲祭主・神官の排除、御師の廃止、祭典の改廃等で信仰的にも組織的にもすっかり改造した。皇祖神としての天照大神を祀る内宮を、神社の本宗（総本山）に仕立て上げるためである。逆にいえば、19世紀半ばまで伊勢神宮は、神社の本宗などではなかったのである。

神宮改造に合わせ、政府は明治4（1871）年5月、神職の世襲制を廃止し、全国の神社を（天皇との距離によって）格付け・序列化する布告を発した。それが皇大神宮（内宮）を別格として全国神社の頂点に置き、その下に官幣社（歴代天皇・皇族等を祀る）、国幣社（古代以来の各国一宮等）、府県社・郷社・村社・無格社をおく、神社制度である。地域に密着した小さな神社の中には、山や川や石を祀っているものも多かったが、神社格づけの過程で、祭神が皇祖神に連なる神に変えられていった。こうして伊勢神宮を頂点とするピラミッド的神社秩序が構築される。

戦後、この国家神道体制はGHQによって解体された。しかし、その中身は、神社本庁に器を移しかえて受け継がれているようにみえる。1980年に採択された神社本庁憲章は「神祇を崇め、

祭祀を重んずるわが民族の伝統は、高天原に事始まり、国史を貫いて不易である」で始まり、「大御代（天皇の治世）の彌栄を祈念」（第1条）し、「神宮を本宗と仰ぎ」（第2条）、「敬神尊皇の教学を興」す（第3条）ことを掲げ、「神社は…皇運の隆昌と氏子・崇敬者の繁栄を祈念することを本義とする」（第8条）と定める。全国神社の99%（2004年現在）が、この皇典講究所、大日本神祇会、神宮奉斎会をベースに結成された神社本庁の傘下にあるということは、戦後60年以上を経て、神社神道が、未だ国家神道の呪縛の中にあることを物語る。「異人種に対する排他的な感情に基づいて神道がある」というのは、この神社本庁の傘下にある神社神道に限定したものだとなれば、ある程度、納得がいく。しかし、再三言うが、それは明治以降、国家が民衆統治の制度として創り出した新しい神道の伝統にすぎない。

多くの人が古くからの慣習だと思っている氏神・氏子制度も、新しく創られたものである。氏神は本来、氏族の祖神（守護神）を意味し、その氏神を祀る氏族の子孫が氏子だった。明治初年の段階でも、各家や同族ごとの氏神がある村もあれば、逆に一向宗門徒の村の中には、氏神（鎮守神）がないことを「誉れ」とする所もあった。それを政府は、一村一（氏神）社にまとめようとする。それと同時に政府が導入したのが、氏子制度である。地域住民を氏子とし、氏子札を持たせ、氏神一氏子の関係を通じて民衆を管理しようとしたのである（田中、227頁他）。一町村一（氏神）社への統廃合がすぐに達成できない中、氏子制度は明治6年5月に中止となるが、その後も神社の統廃合は執拗に続けられ、それが戦後日本社会の氏子・氏神の概念や慣習へと繋がっている。神社本庁憲章は第15条で「氏子区域に居住する者を伝統的に氏子とし」云々と定め、戦後も神社では、住民の意識にかかわらず、氏子区域を設定しているが、そこでいう「伝統」は明治政府が創り出した制度の残像にすぎない。本来、一族の祖神であった氏神を、地域住民全体へと強引に拡大し変質させておきながら、外国人は入れないというなら、それは民族国家の民衆統治の装置として産み出された経緯による性質に他なるまい。

一町村一（氏神）社体制を執拗に目指す政府

は、1906（明治39）年、大々的な神社合祀を断行した。1900年に19万6358社あったという神社を、1920年には11万5506社に減らしている。地域によってはより過酷で、南方熊楠の「神社合併反対意見」（1912年）によれば、三重県では6489社が942社に、和歌山県では3700社が600社に減っている。旧社地の森林は伐採された（小澤、54頁、井上順孝『神道入門』平凡社、2006年、117頁）。日露戦争を経て、人々の意識を、より一層現人神・天皇への信仰へ収斂させるためである。合祀といえば聞こえがいいが、聖域＝モリの抹殺である。

神社以外の小祠・神祠など、小さき神々は、より容赦なく抹殺されていった。政府は明治9年12月、小祠廃併合令を発し、大分県大肥村（大八区第三小区）では31祠を村社に「合祀」したという。ここで生き残った祠も、度重なる掃討の波に襲われ、熊本県阿蘇郡では、明治17・18年の社寺取調べで、新たに発見された合計434の神祠が村社に合併されている（安丸、169～172頁）。こうして生活空間のそこここにあった大小様々な神々が消え去り、人々の心の中にあった土着の信仰や、様々な神とともに暮らすという観念も消えていったのだと思われる。

生き残った神社の間でも、明治維新以降、政府主導で各地神社の祭神が記紀の大和（天つ神）系統へ変更されたり、いろいろな神が合祀されたため、現在、本来の祭神が分からなくなってしまっている所が多い。門脇禎二氏は、能登半島の先端の方で、一つの谷筋の神社を調査した時、現代の祭神ではほとんど大和の高天原系統の神の名前であるが、合祀された神を元へ解きほぐしていくと、その谷筋がほとんど全部出雲系の神に変わってしまったと述べている（門脇禎二「越と出雲—ヌナカワヒメ伝承をめぐって」森浩一編『古代翡翠道の謎』新人物往来社、1990年）。もともと日本海沿岸は（太平洋沿岸や瀬戸内海沿岸と違って）圧倒的に出雲系の神が多かったという（森、23頁）。

大日本帝国の歴史を宗教面でみるならば、廃仏毀釈に始まり、現津神（天皇）の人間宣言に至る、まさに神殺しの時代だった。こうして日本人の多くは、古来から地域で拠り所になっていた土地本来の神々＝宗教的ルーツを失い、それが今に至る日本人の宗教的アイデンティティの

空ろさに繋がっているように思われる。

5. 神道の本髄

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は1890年、「神道の本髄は、書物の中にあるのでもなければ、儀式や戒律の中にあるのでもない。…風変わりな迷信や、素朴な神話や、奇怪な呪術のずっと奥に、民族の魂ともいえる強力な精神がこんこんと脈打っている。日本人の本能も活力も直感も、それと共にある」と述べている（『杵築—日本最古の神社』『新編・日本の面影』角川書店、2000年）。

ハーンのいう「風変わりな迷信や、素朴な神話や、奇怪な呪術」とは、当時、迷信・猥雑・浪費というレッテルを貼られ、消滅・弾圧の対象とされた土俗的な民間信仰そのものであり、ハーンはそれが出雲によく残っているのを見出し、神道の本髄だと感じたのである。これは、神社を主体と考える神道民族宗教論とは、全く異質な神道論を提示する。1890（明治23）年といえば、明治15年の神官と教導職の分離で、神社の宗教的活動が禁止されてから8年を経ており、前（1889）年の大日本国憲法と同年の教育勅語発布で、国家神道が確立する時期である。しかし、祭神論争でパージされ、神道の二大支柱から教派神道13派へ転化した故に、出雲（大社）では、古来の宗教的活動が続けられていた。

ハーンはまた、1896（明治29）年夏、出雲の「古い美保関の港の近い小さな入り江を見渡せる」加鼻の東屋で「無上の快樂」にひとりながら想ったことを、こう記している。「こうした東屋は……大切なことを私たちに教えてくれる。それは……幸福の要諦は知足、すなわち…日々の暮らしにこと欠かず、自然が万人に与えてくれる素朴な喜びに満ち足りて、私欲をすて家庭知人と仲良くやっつければ、それで十分、もう望むことはないという心構えだ。……そういう古い暮らしぶりをほんの東の間でも味わった者には、西洋で叩き込まれる考え方—「生存競争」だとか「闘争は義務」だとか、富や地位を得るためには、なりふりかまわず弱い仲間を踏みつけに「せねばならぬ」とかいう教えは、何か恐ろしく野蛮な社会の掟のように思えてくる。日本人は、遙か昔から、我を去り幸福

になるのはいともたやすい—健康でいて、食うに困らぬだけは働いて、人並みの道徳的・美的感覚に恵まれ、それを自然に育めれば、もう十分なのだと心得ていた。それ以外の人生の糧はといえば、喜びと美と愛と平安だろうが、これは自然だけが私たちに与えてくれるものなのだ（『出雲再訪』『明治日本の面影』講談社学術文庫、1990年、339頁）。

ハーンが19世紀末に書いたこの文章は、競争が煽られ、「勝ち組・負け組」などという言葉が流行る21世紀初頭に生きる日本人にとって、驚くほど新鮮である。と同時に、ハーンが、来日して数年にして、神道の源流・本質を、ものの見事に見抜いていることに、感服せざるを得ない。ここで彼が述べている観念から、外国人の彼が紛れもなく、神道を理解し、信じていたことが分かる。そのハーンが「自然や人生を楽しく謳歌するという点でいえば、日本人の魂は、不思議と古代ギリシャ人の精神によく似ている」（杵築—日本最古の神社）と言うように、自然神道の本質は大らかなものであり、決して日本人固有のものでも、異民族に対する排他的感情に基づく狭小なものなどでもない。

神道が一定の地域外に広がらない性質があるというのは、民族ではなく、それが風土に根ざした、いわば土着の信仰だからであろう。沖縄海域から北上し、神在月の頃だけ「闇を照らして」海岸に寄り来る海蛇を神の使いとみなす出雲の竜蛇信仰などは、この地域の海流の流れとその季節による変異が生み出したものである。このように、その土地以外では意味をなさない信仰もあろう。しかしそれは、人ではなく、自然によるもので、もとより外国人を排除するものなどではない。ひるがえってみると、ハワイの神社が祀るべき神は、ハワイの海の神や山の神であり、人格神であっても、大和神話や出雲神話の神々などではなく、マウイ島なら、島の創造神であるマウイなどではなからうか。布哇（ハワイ）大神宮は、天照皇大神、天之御中主神とともにGeorge Washingtonをアメリカ合州国の国父、Abraham Lincolnを中興の祖、カメハメハ大王1世をハワイの功労者とみなし、祭神として祀っている（井上、51頁）というが、こうした国家神道の要素は、信仰としては浸透しないのではないかと思われる

おわりに—国家神道の克服

2009年1月4日、麻生太郎首相は伊勢神宮を参拝し、「国民の安寧、国家の繁栄」を祈ったという。中曽根首相も小泉首相も靖国神社参拝では宗教色を薄めようと苦心したが、歴代首相の伊勢参拝は、お清め、二礼二拍一礼、玉串料の奉納など、伊勢神道形式で行われている。玉串料は私費で払うが、随行する秘書官らは公務で、旅費も公費である。

戦前の首相は新年の他、就任直後にも伊勢神宮に参拝していたが、敗戦後、GHQ（連合国軍総司令部）の「神道指令」で、東久邇宮首相の就任直後の参拝（1945年9月）を最後に途絶えた。その後幣原、芦田、吉田、片山首相時代は参拝していないが、1955年、鳩山一郎首相の参拝で復活。池田勇人首相（1961～64年）は参拝しなかったが、1975年以降、歴代首相は恒例行事のごとく参拝するようになっていく。

なぜ首相が新年に伊勢神宮を参拝するのか？一産経新聞の取材に対し、首相官邸は「伊勢神宮は日本の神社の総本山であり、祀られている天照大神は太陽の神様で、太陽は国にとって大切な存在であり、首相が念頭に参拝することで、国家の安寧を祈願する意味がある」（首相秘書室）と答えたという（「首相の年頭行事として定着—伊勢神宮参拝」MSN産経ニュース、2007年12月25日）。GHQが警戒したのは、太陽信仰ではない。皇祖神・天照大神を祀るからと言わないこの奇妙な回答が、首相官邸が問題の所在を弁えていることを逆に物語る。しかし日本人の多くは、それに気づいていない。

首相在任中、毎年靖国神社へ参拝した小泉純一郎元首相は、2002年4月21日、「私の参拝の目的は（明治維新以来の国事殉難者を）衷心から追悼し、「平和を守り……不戦の誓いを堅持する」ためだと述べた。また2006年8月15日にも「戦没者の方々に哀悼の念を表す」「戦争犠牲者に対して、心から哀悼の念を表すべきだ」と語っている。この発言は、靖国神社の神を信仰する立場から見れば、神を神とも思わぬ冒涇と映る。新野哲也『日本人と靖国神社』（光人社、2003年）は、「神社は神霊の加護を求める場所」であり、「靖国には戦没者の霊を悼み、平和と

不戦の誓いを新たにするという神事も機能もない」し、「神々に慰めや悼み」を表すとすれば、「身のほど知らず」「祭神に対して不遜にして不敬」であり、また「祭神を……戦没者として哀れめという」のは「蛮行」である（41～42、215頁）と述べている。

だがその小泉首相の参拝に共鳴し、同神社への8月15日の参拝者数は、小泉政権の下で12万5000人（2001年）→20万5000人（2005年）→25万8000人（2006年）に増えた。信仰心のない参拝者で境内が埋めつくされるのに伴い、靖国神社の神々の権威は逆に貶められたようにも思える。同じ時期、靖国神社崇敬奉賛会の会員数が9万3000人（2002年）→8万人（2005年）→7万3000人（2008年）へと反比例的に減っていることが、それを物語る。靖国神社の祭神を神として信仰しない人々が、大挙して参拝に押しよせる—そこに筆者は、人々の宗教的アイデンティティの大きな歪みを感じる。

日本人が首相の伊勢神宮・靖国神社参拝を真剣に議論すべきなのは、何よりもまず、国家神道が日本人の伝統的精神世界を修復不能なほどに破壊してしまったものだからである。その自身の精神世界に真摯に向き合うことなしに、外交や憲法の側面から議論しても、上滑りし続けるだろうし、壊れた宗教的アイデンティティを修復或いは再構築することにもつながらないと、筆者は考える。

（福岡県立大学准教授）

<参考文献>

- 村上重良『国家神道』岩波新書、1970年。
- 井上順孝『海を渡った日本宗教—移民社会の内と外』弘文堂、1985年。
- 中牧弘允「ハワイにおける日系霊能者と民間信仰」『国立民族学博物館研究報告』5巻2号、1980年。
- 武光誠『日本人なら知っておきたい神道』河出書房新社、2003年。
- 谷川健一『日本の神々』岩波書店、1999年。
- 小澤浩『民衆宗教と国家神道』山川出版社、2004年。
- 田中彰『明治維新』講談社、2003年。
- 森浩一編『古代の日本海諸地域』小学館、1984年。
- 安丸良夫『神々の明治維新』岩波新書、1979年。